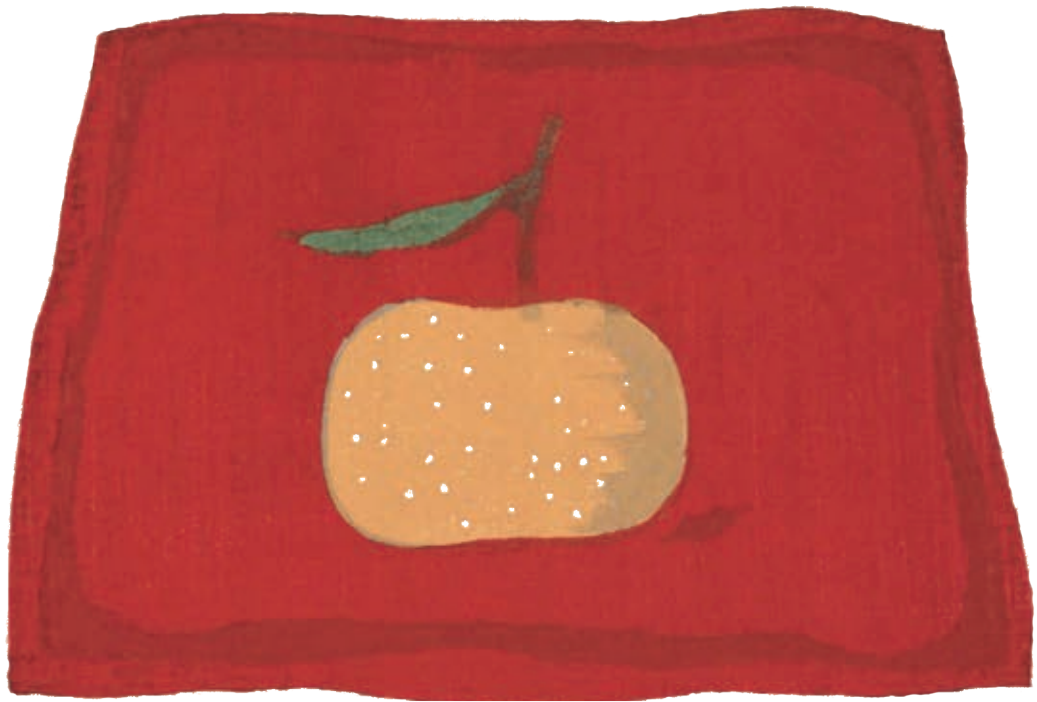


---

NATIONAL  
D I E T  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2019.2

国立  
国会  
図書館  
月報

---



第 84 回 IFLA 年次大会

本の森を歩く 机の上の戦争 近代日本の「ウォーゲーム」

---

694 号 2019 年 2 月

---

# 国立

# 国会

# 図書館

# 月報

NO. 694

February 2019

CONTENTS

## 1 「享保名物帳」

―伝えられてきた「名物」刀剣―  
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

## 4 第84回IFLA年次大会

12 本の森を歩く 第19回

## 机の上の戦争

近代日本の「ウォーゲーム」

## 18 第12回APPLEP大会

24 デジタルライブラリーカフェ「今年も」 開店中

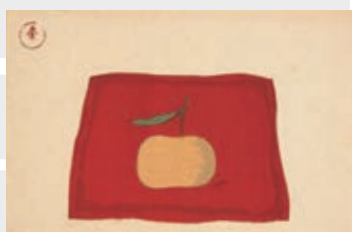
22 館内スコープ

ホームページの「顔」

23 本屋にない本

『石田英吉年譜』

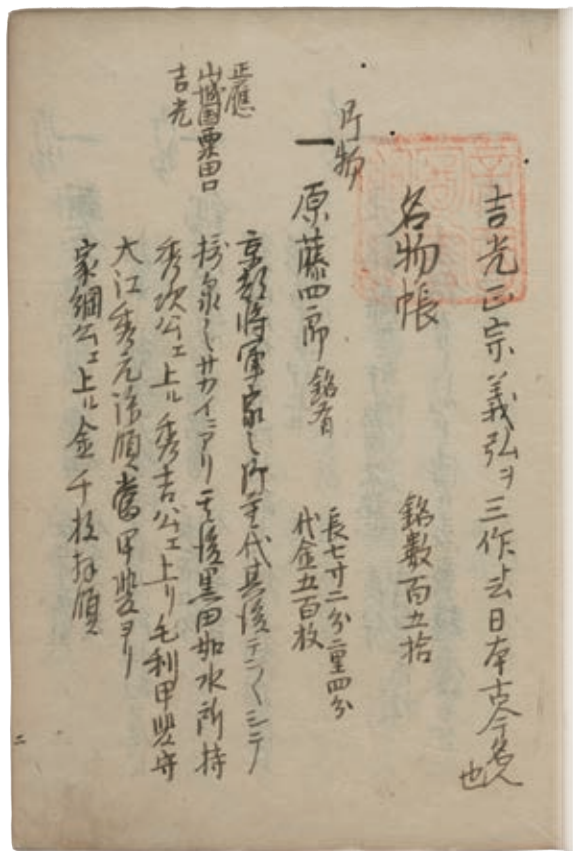
26 NDL TOPICS



表紙：  
「布上果實圖」深澤索一画  
『創作版画 第14輯』版画の家  
1928 27cm  
<請求記号 YR5-22>

# 「享保名物帳」 ——伝えられてきた“名物”刀剣

町屋 大地



第1類「名物帳」

## 『名物帳』

本阿弥市郎兵衛 [編] [1--] [写] <請求記号 197-273>

## 『刀剣名物帳』

[1--] [写] <請求記号 わ756-5>

日本刀ブームと言われるようになって数年が経つ。全国各地で展覧会が次々と開催され、平成30年秋に京都国立博物館で開催された刀剣特別展には25万人余りが訪れるなど、かつてない注目が集まっている。

展覧会で刀剣を鑑賞する際に、キャプションに「名物」とあるのを目にしたことはないだろうか。今月紹介するのは「享保名物帳」と呼ばれる日本刀の名品を収録した一種の目録あるいは解説書と呼ぶべきものである。この資料に記載された刀剣は特に「名物」と呼ばれ、その多くが国宝や重要文化財、重要美術品に指定されている。

「享保名物帳」は、享保の改革で知られる江戸幕府八代將軍の徳川吉宗（1684

（1751）の命により、刀剣の研磨・

浄拭（ぬぐい清めること）・鑑定を家業とする本阿弥家によって享保年間（1716（1736）にまとめあげられ、提出されたとされてきたが、編さん経緯には解明されていない部分が多い。その原本の所在は不明であり、複数の写本のみが伝わっている。写本は「厚藤四郎」から始まる第1類と、「平野藤四郎」から始まる第2類の2つの類型に大別されている。国立国会図書館では両系統の写本を計3つ所蔵しており、ここでは2つの写本を見ていきたい。

まず、第1類に属する『名物帳』を見ていきたい。冒頭の内容を見ると、

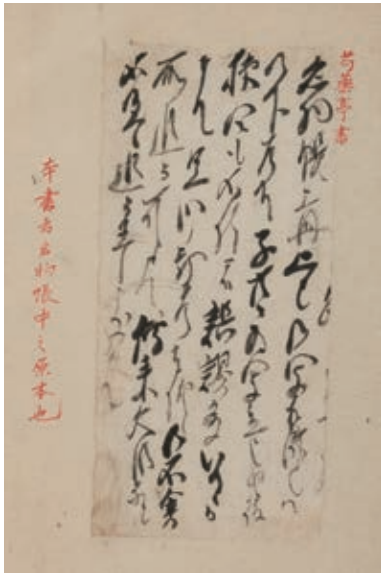
御物

一 厚藤四郎 銘有 長七寸二分 重四分

代金五百枚

と所蔵者、名称、銘の有無、寸尺、評価が記載され、次にその刀の由緒・来歴が示される。来歴を見ると、足利將軍家に伝わり、黒田孝高、豊臣秀次、豊臣秀吉、毛利秀元といった武将を経て、徳川將軍家の所有となったことがわかる（現在は東京国立博物館蔵）。

また、儒学者で有職家でもある榊原香山（源長俊、1734（1798））により安永8年（1779）8月の序文が付され



第2類『刀剣名物帳』

(上)「昔ノ名剣御所之劍」より。

(左) 表紙裏には紙片が張り付けられ「芍薬亭書」と書かれている。芍薬亭は本阿弥光恕のこと。

(下) 蔵書印には「秋霜軒收藏図書之記」とあり、この写本が鑑刀家として著名な子爵・松平頼平（1851～1929）の旧蔵資料であることが確認できる。



ている。そこには、本書は高田英通という人物が所蔵していた書を筆写したものであるが、もともとは享保年間に將軍の命をうけて本阿弥家が献上した書、とある。

構成としては吉光・正宗・郷義弘の「三作」、その他刀工、焼失刀劍の順に並び、各刀工のうちでは御物すなわち將軍家の所蔵品を先に並べる。

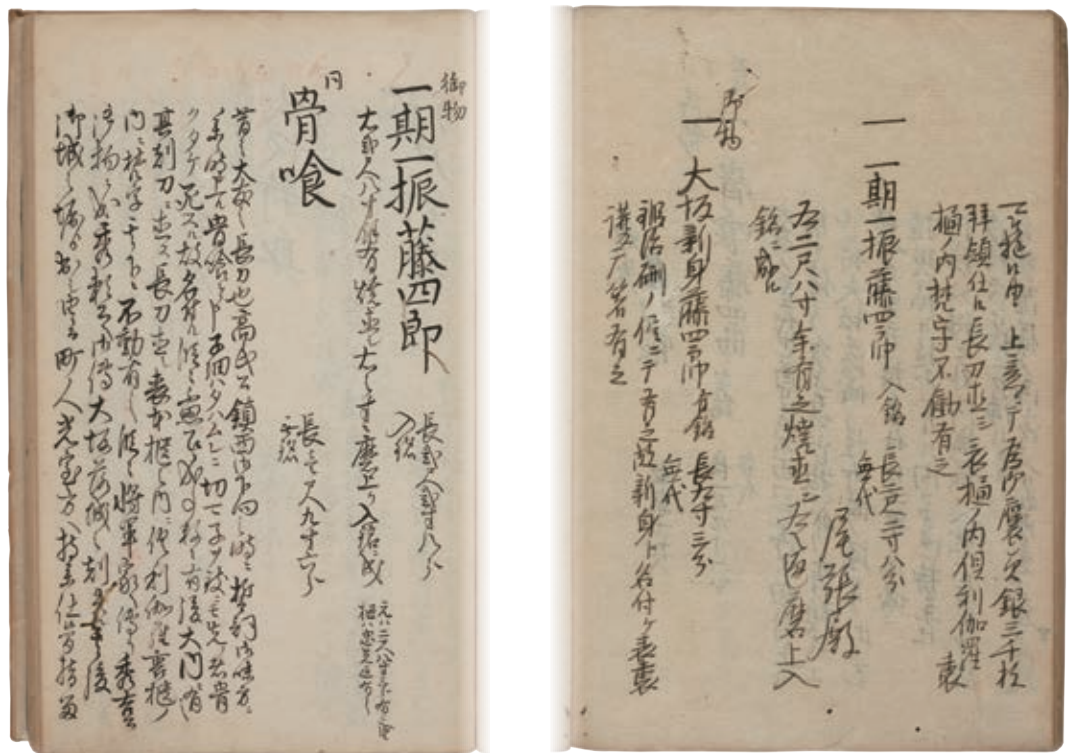
さらに、この写本と異なる系統、第2類に属する『刀剣名物帳』を見てみよう。

刀劍の所蔵者、名称、銘の有無、寸尺、評価、由緒・来歴が示されているのは同様であるが、「平野藤四郎」が冒頭に來ている。見開きの右側に目を向けると本阿弥家の歷代当主の名と花押に並んで

名物劍集  
有徳院様御代享保四亥年十一月撰上候由  
本阿弥光忠代

との記述がある。有徳院とは吉宗を指し、本阿弥光忠（？～1725）は当時の本阿弥家の当主である。

構成としては「三作」の上巻、その他の刀工の中巻、焼失した刀劍の下巻の三部構成を取る。その後には本阿弥光恕（1767～1845）が追記したと考えられる「名物追記」及び「昔ノ名剣御所之劍」と題する部分が存在する。



(右) 第1類『名物帳』より。(左) 第2類『刀剣名物帳』より。  
「一期一振藤四郎」について、右は尾張殿(尾張徳川家)、左は御物(徳川將軍家の所蔵)としている。

両写本を比較すると、第2類にのみ掲載される刀剣があり、また所蔵者の記載にも異同が見られ、概して第1類の方が来歴等の記述が簡潔であることが指摘されている。これらのことから、第1類は幕府に提出したものの写し、第2類は本阿弥家における調査記録の写しとされていたが、どちらも本阿弥家内部の記録をもとにしたもので、第2類は後世に本阿弥光恕の周辺によって増補されたという最近の研究もある。

いづれにせよ、江戸時代中期に成立したと思われるこの「享保名物帳」自体は当初「秘書」として認識されていたものの、有職家、鑑刀家、研師、あるいは刀剣愛好家に写本が伝わっていった。筆写した人たちも、なかなか目にするのではない刀に思いを馳せてきただろう。時代が下ると、翻刻の出版や出版物での言及によってさらに「名物」刀剣への共通認識が構築されていくことになる。

現在の日本刀ブームのきっかけとして、刀剣をモチーフにしたゲームとその関連作品の人氣が指摘されている。作品においては、作刀にあたっての伝承や、旧蔵者のエピソードをもとに、刀剣を巧みに「擬人化」したキャラクターが登場する。例えば、本

書に骨喰藤四郎は(焼損を受け)「焼直し」されたところがあるが、記憶を失ったキャラクターとして設定されるなど、モチーフとなった刀剣への関心が掻き立てられる構造である。そう考えると現在の刀剣ブームの端緒は人びとに共通の「名物」観を与えた「享保名物帳」の成立にある、などというのは言い過ぎであろうか。

- 1 「享保名物帳」との呼び方は近代に入ってからのものであり、各写本においては「名物鑑」、「名物帳」、「刀剣名物帳」などと題されている。
- 2 <https://colbase.nich.go.jp/collectionItems/view/12f08f3c06a62af80737925634848303/55561>
- 3 国立国会図書館デジタルコレクションで大正2年に刊行された『詳註刀剣名物帳 附・名物刀剣押形』(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/951683>)等の翻刻本が閲覧可能である。
- 4 骨喰の号は、切る真似をしただけで人の骨が砕けるという切れ味の言い伝えによる。

○参考文献

- 深井雅海『刀剣と格付け 徳川將軍家と名工たち』吉川弘文館 2018<請求記号 KB335-L79>  
川見典久『「享保名物帳」の意義と八代將軍徳川吉宗による刀剣調査』『古文化研究 黒川古文化研究所紀要』15号 黒川古文化研究所 2016<請求記号 Z71-H14>  
佐野美術館、徳川美術館、富山県水墨美術館、根津美術館編『名物刀剣一宝物の日本刀一』佐野美術館 2011<請求記号 KB16-J931>  
辻田吉義『名物刀剣に関する考察』『刀剣美術』224号~226号 日本美術刀剣保存協会 1975<請求記号 Z11-282>  
辻本直男 補注『図説刀剣名物帳』雄山閣出版 1970<請求記号 KB335-10>

## 第84回

# IFLA年次大会

平成 30 年 8 月 24 日 (金) ~ 30 日 (木)  
クアラルンプール (マレーシア) 等



世界中の図書館が協力しあい、共通の問題を解決し、図書館の未来を切り開いていく存在、それが国際図書館連盟、略称IFLAです。

毎年開催されるIFLA年次大会では、世界中から多くの図書館員が集まり、図書館に関する多くの課題について最新の知見を情報交換し、議論を交わします。

今年はマレーシアの首都クアラルンプールで開催されました。テーマは「図書館の変革、社会の変革」です。世界各国から約3500人が参加し、期間中は、分科会等による多数のオープンセッションのほか、各国図書館団体や関連企業等が出展する展示会や、ポスターセッション等が行われました。年次大会に合わせ、国立図書館長会議(CDNL)や、関連する行事も開催されます。

国立国会図書館(NDL)は、今年も派遣団を組織し、分科会等に出席し、議論や発表などを行いました。





開会式には、5月に就任したマハティール首相がビデオメッセージを寄せていました。

## 開会式



昼食会で、シンガポール国家図書館委員会 CEO (左) Elaine Ngさんと、マレーシア図書館協会顧問 (中央) Zaiton Osmanさん。

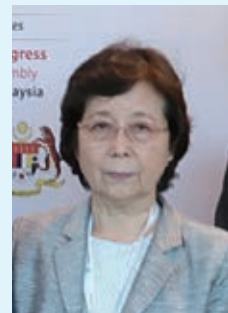
主な会場となったクアラルンプール・コンベンション・センター(KLCC)。高層ビルが立ち並ぶ中にあります。



「アジアの国々は変化に果敢に挑戦している。」今回 IFLA に参加しての印象です。

開催地がマレーシアだったからでしょうか、会場にはアジアの人々の姿が目立ちました。IFLA は 'Global Vision' の実現に向けて活動していますが、これはアジアを含めて図書館界に大きな変化をもたらすことになりそうです。

会期中どの場面でも、クアラルンプールという都市の特徴である民族的多様性と文化の多様性も実感できる会議でした。



団長・羽入佐和子  
(館長)



大島薫  
(総務部司書監)

例年になく酷暑の日本から到着したマレーシアは、予想外に涼しく感じました。会議場となった KLCC の周辺は、公園を囲んでペトロナスツインタワーや高層のお洒落なショッピングセンターやホテルなどが林立し、夜も賑わっていました。道路は、渋滞が激しく、歩道をオートバイが走っているのが印象的でした。発展を続けるマレーシアの活力が感じられました。

# 国立図書館長会議(CDNL)



今年のCDNLはディスカッション中心のプログラムでした。インタラクティブプログラムでは、2つのお題について15分ずつ、対面で各国の代表者と討論し、次々に隣にずれていきます。この写真のお相手はインドネシア国立図書館長代理 Yoyo Yahyono さん。



寺倉 憲一  
(国際子ども図書館長)  
団長代理

館長の代理で国立図書館長会議に出席しました。文字どおり世界中の国立図書館の代表の皆さんにお会いし、それぞれの課題や最新の取組について意見交換できたのは刺激的な体験でした。各国の置かれた状況により国立図書館の抱える課題も様々でしたが、世界の図書館をめぐる最新動向に目を向けて情報を収集し、業務を改善しようという熱意は、どの国の図書館長にも共通しているように感じられたのが印象的です。



グループディスカッションでは、「国立図書館と持続可能な開発目標」というテーマの下、目標とすべき項目を記載した11のカードが用意され、緊急性を縦軸、国立図書館の貢献度合いを横軸にとった座標平面上のどこに各項目が位置付けられるか議論しながら、それぞれのカードを置いていきました。我々のグループでは、緊急性と貢献度が一番高い右上に「公共情報へのアクセス」を置きました。



会場の王立博物館（旧マレーシア王宮）。イギリス植民地時代の華僑のお屋敷だったそうで、とても豪華です。



集合写真。手に持っているのは IFLA Global Vision の広報キットです。



## 議会図書館



オープンセッションでの報告の様子。

議会向けの図書館・調査サービスの変革をテーマとするオープンセッションで、調査及び立法考査局が毎年実施している内部研修プログラムについて報告しました。その後のディスカッションや他の参加者の報告では、日頃考えたことがなかった課題に気付かされるなど、大変刺激を受けました。また、他の会合やイベントを通じて様々な国・館種の図書館の方々と交流することができたのは、IFLA 年次大会ならではの得難い経験でした。



小林公夫  
(調査及び立法考査局政治議会調査室主幹兼政治議会課長事務取扱)



報告後のグループディスカッション。

## 政府機関図書館



吉間仁子  
(総務部支部図書館・協力課)  
政府機関図書館分科会  
連絡委員

70周年を迎える日本の支部図書館制度において積み重ねてきた経験が、国連の持続可能な開発目標 (SDGs) の目標 16 の「有効で説明責任のある透明性の高い公共機関の発展」や「情報への公共アクセスの確保」に通底することについて報告を行いました。



ナレッジカフェ方式のグループディスカッション。



IFLA 初? 朝のフィットネスプログラム。手前の白いシャツが吉間委員。



ブレカンファレンスでマレーシア国際貿易省図書館を見学。国立図書館職員が配置されていて、認知度も高いです。



## 官庁出版物



井上佐知子  
(電子情報部電子情報流通課)

電子政府をテーマとしたオープンセッションで、NDL がインターネット上で公開している東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」を紹介しました。地震を始めとした自然災害に苦しむ国は、世界でも少なくありません。国立国会図書館の取組が、災害の記録等の保存と共有による防災への貢献として、参加者の皆さんに参考にしていただけたら幸いです。



マレーシアの食事ナンレマ。上から時計回りにフライドチキン、牛肉の時雨煮に近いもの、ココナツミルクで炊いたご飯、エビと野菜を煮た非常に辛いもの。

## 情報技術

「エメラルド婚式」ってご存知ですか？ 結婚 55 周年のことなのですが、情報技術 (IT) 分科会が、なんと今年、このエメラルド「設立 55 周年」を迎えました。実は私より先輩だったのです(えっ、そうは見えない?!)。でも今回、しみじみ IT を振返るだけでなく、ゲーム (利用者教育や IT リテラシー向上への活用) や、ソーシャルメディア保存のセッションもあり、諸外国の進んだ取組に直に触れることができました。参加できて良かったです。

竹鼻和夫  
(電子情報部主任司書)  
情報技術分科会連絡委員



展示スタンプカードや IFLA グッズ。



ペトロナスタワーから会場の夜景。

## 書誌・目録



目録分科会常任委員会のビジネスミーティング。常任委員は会議卓に着席。



柴田洋子  
(収集書誌部収集・書誌調整課)  
目録分科会常任委員



MulDiCat の編集作業グループの担当者打合せは、会場内のカフェで。

ビジネスミーティングは、参加者に立ち見が出るほどで、目録分科会の活動に対する皆さんの関心の高さがうかがわれました。また、書誌分科会では、NDLの常任委員も編集している全国書誌のコンプラクティスの進捗状況が報告されました。私は、目録関連の用語や概念がさまざまな言語で定義された辞書 MulDiCat の編集作業グループの一員でもあります。担当者の打合せでは、目の前で繰り広げられる議論についていくのに必死でしたが、一つの目的に向かって協力しながら前進していることを実感できました。

## Japan Caucus Meeting

日本図書館協会の国際交流事業委員会が主催する日本からの参加者の交流のためのミーティング。



## 文化のタベ

観光センターで行われました。



## FIRST TIMER

初めて参加する人たちのためのセッションでは、大会の概要や見どころの紹介が行われました。IFLA 公式 twitter では、フィンランドからの参加者と一緒に写真を撮る柴田委員の姿が。



## 資料保存

デジタルの保存をどうしていくかが今の図書館界の大きなテーマで、セッションでも多くの聴衆を集めていましたが、一方で東南アジア等の図書館からは、地域の気候や条件に合った紙資料の保存の工夫と苦労がうかがえる報告があり、「資料保存」で扱われる領域が広がっていることを実感しました。



佐藤 従子

(収集書誌部司書監)

資料保存分科会常任委員 /  
資料保存戦略プログラム (PAC)  
アジア地域センター長



資料保存分科会常任委員会での協議の様子。

## 児童・ヤングアダルト



クアラルンプール図書館 TTDI 分館でのオフサイト・セッション。いきなりディスカッションのファシリテーターを担当させられ、冷や汗をかきました。それぞれの国や組織の観点から、IFLA 児童・ヤングアダルト図書館分科会で策定した新たな児童サービスのガイドラインに関する意見が交わされました。

今年、児童・ヤングアダルト図書館分科会は、シンガポール国立図書館を会場としたサテライト・ミーティングにおいては「特別なニーズのある人々への図書館サービス分科会」との共催により、また、クアラルンプールでの本大会においては、「環境、持続可能性と図書館分科会」との共催により、二つの公開セッションを行いました。各セッションでは、各国図書館・学校図書館等での素晴らしい取組が紹介されました。異なる分科会との共催として、児童サービスを新たな切り口から見直すことができ、非常に密度が濃く、学びの多いセッションになりました。

各国図書館での取組は、伝統的な読書推進にとどまらず、多様に配慮し、子どもたちが自分で考え、生き抜いていくための情報リテラシーを身に着けることに重きが置かれている印象を受けました。児童サービスの概念の幅が広がってきていることを感じます。



中島 尚子

(利用者サービス部科学技術・経済課)

児童・ヤングアダルト分科会  
常任委員



サテライトミーティングが行われたシンガポール国立図書館の建物地下1階にある中央図書館の中の子ども図書館。木の葉の部分はペットボトルに色をつけて、職員のみなさんが作ったのだそうです。たくさんの親子連れでにぎわっていました。



ホテルの掲示。ドリアン持ち込み禁止!

# ポスターセッション



北野仁一  
(関西館図書館協力課)



青山真紀  
(利用者サービス部人文課)

Connections and Collaboration of 800 Libraries in Japan  
**Collaborative Reference Database**

◆What is the CRD?  
The CRD is a comprehensive service constructed by the National Diet Library, Japan (NDL) of staff reference queries and their responses acquired from numerous libraries throughout Japan.

◆Objective  
The CRD helps staff reference queries together with other data considered useful to the research activities of editors and librarians and made available via the internet.

More than half of our **200,000** records are available online!

- Reference Examples
- Search Guides
- Special Collections Guides
- Profiles of Member Libraries

Share information about unanswered queries!  
Get answers to questions + Discover new questions!

Member Libraries  
Public Libraries / University Libraries / School Libraries  
Special Libraries: Archives, NDL, and its Branch Libraries

Member Libraries: 375 → 719  
Aggregated Data: 21,355 → 205,105

NDL's initiatives to enhance the CRD

- Formulating guidelines for registering data records
- Organizing seminars, forums, and workshops
- Initiating email inquiries
- Conducting surveys that have registered large volumes of data

For non-member libraries and the general public

- Hosting seminars to introduce the CRD
- Improvement of the CRD via Twitter
- Creating records and guides to publicize the presence and use of reference services

Forum Twitter

Read the Past, See the Future  
国立国会図書館  
National Diet Library, Japan

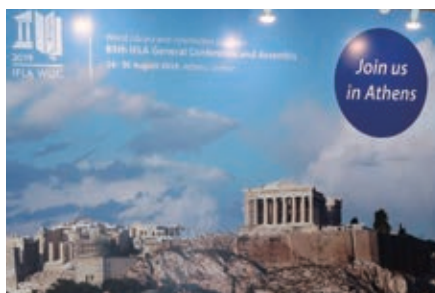
「レファレンス協同データベース-日本における約 800 の図書館のつながりと協同-」と題して、IFLA のポスターセッションで初めて「レファ協」を紹介しました。多くの方が強い関心を示してくださり、レファレンスの回答やプロセスを検索できるのは便利、良いアイデアである、ぜひ使ってみたい等のコメントをいただき嬉しく思いました。また海外では図書館の連携は館種ごとに分かれているため、レファ協に全館種が参加しているのは素晴らしいという感想が多く聞かれました。ポスターセッション会場は気軽に意見交換できる場で、活発なやり取りが行われ、とても盛況でした。



れはっち、初のポスターセッション!



今回はギリシャのアテネで開催。

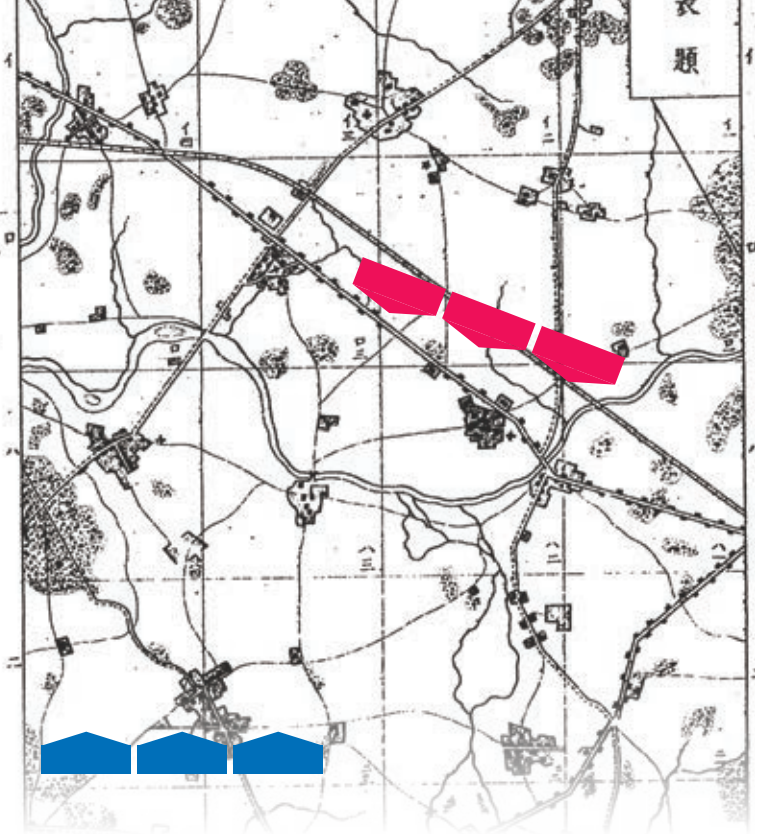


展示会場には、マレーシアの手工芸品の制作体験ができるコーナーもありました。



## 本の森を歩く 第19回

### How to Play the WAR GAME



# 机の上の戦争

## 近代日本の「ウォーゲーム」

宇野 亮一

「ウォーゲーム」とは、いったい何でしょうか。戦争のゲームというところから物騒ですが、軍事用語で「机上作戦演習」「図上演習」のことを指します。机の上で戦況をシミュレートし、戦略を立てることは、古代から行われていました。近代の西洋では、より精密に戦場を模したウォーゲームが発展し、作戦研究に用いられるようになります。

一方、ノルマンディー上陸作戦や川中島の戦いといった歴史的な戦争の局面を再現したボードゲームなど、戦争を模したゲーム(遊戯)のことをウォーゲームと呼ぶこともあります。王や歩兵といった駒がある将棋やチェス、敵の軍と陣取りをする囲碁なども、広い意味では抽象化されたウォーゲームと言えるかもしれません。

ここでは、国立国会図書館の所蔵する資料から、近代日本におけるウォーゲームの姿を追います。

### 日本への導入は陸軍から

明治維新後、近代化を目指した日本では、軍の能力向上にウォーゲームが活用されました。「兵棋」「兵碁」とも「図上演習」と訳されたようです。

「兵棋」という検索語で国立国会図書館オンラインを検索して見つかる最古の資料は、1881(明治14)年発行の『兵碁教範』(1左ページ)です。これはドイツの参謀メッケルが1874年に著した資料を陸軍が邦訳したものです。なお、メッケルは陸軍大学の教官として1885(明治18)年に来日しています。この資料は、いわば兵棋の「ルールブック」と言えるもので、用いる地図や隊標(コマ)、審判にあたる「統裁官」の役割などが述べられています。

目を引くのが、大きな表です(左ページ上)。この表は、武器の種類や相手との距離による、対象への攻撃結果を一覧にしたものです。特徴的なのは、さいころの目によって結果が変わる、すなわち結果が乱数に左右される点です。囲碁や将棋であれば、石を打ったり駒を進めたりすれば確実に相手を取れますし、逆に双六であれば基本的にさいころの目だけで勝敗が決まります。このルールでは、行動によって有利不利が生じる一方、さいころで不確実性ももたせることで、実際の戦闘の「決断」と「運不運」の両方の要素を反映させています。

撃射ノ兵歩

表一第

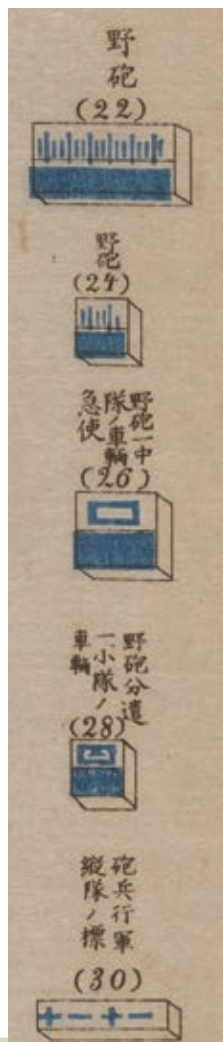
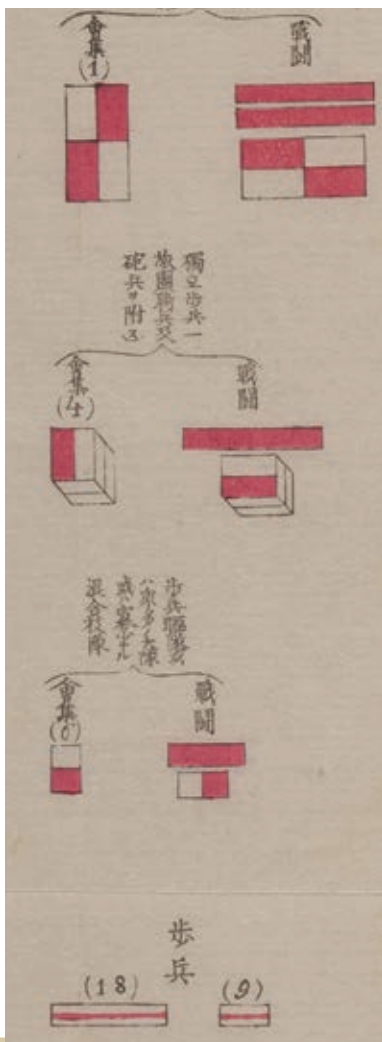
効火ノ隊小一兵歩

(半時分二)次節一八間時ノ撃射

ル雷・ルタツ夫ヲカ火ノ門二砲大ハ在ニ兵砲員人ノ隊中一ハ在ニ兵騎隊小一ハ在ニ兵歩ハ數損ノ點十六

的表	距離 メートル	効下最					効下					効中					効上					効上最										
		●	●●	●●●	●●●●	●●●●●	●	●●	●●●	●●●●	●●●●●	●	●●	●●●	●●●●	●●●●●	●	●●	●●●	●●●●	●●●●●	●	●●	●●●	●●●●	●●●●●	●	●●	●●●	●●●●	●●●●●	
兵歩 兵砲	100 200	1 3	1/2 5	2 10	1/2 15	2 20	3 30	2 10	2 1/2 15	3 20	4 30	5 40	6 50	7 60	8 70	9 80	10 90	11 100	12 110	13 120	14 130	15 140	16 150	17 160	18 170	19 180	20 190	21 200	22 210	23 220	24 230	25 240
兵歩 兵砲	100 200	1 2	1/2 3	1 5	1/2 10	2 15	2 1/2 20	3 25	3 1/2 30	4 40	5 50	6 60	7 70	8 80	9 90	10 100	11 110	12 120	13 130	14 140	15 150	16 160	17 170	18 180	19 190	20 200	21 210	22 220	23 230	24 240	25 250	
兵歩 兵砲	200 500	1 1	1/2 1	1 2	1/2 3	2 5	2 1/2 7	3 10	3 1/2 15	4 20	5 30	6 40	7 50	8 60	9 70	10 80	11 90	12 100	13 110	14 120	15 130	16 140	17 150	18 160	19 170	20 180	21 190	22 200	23 210	24 220	25 230	

節次ノ數	赤軍				藍軍			損數表			
	兵	步	兵	砲	兵	砲	工兵				
4	4	2	1		3		5	1	3	4	
1	1										
2	4	2						2 1/2			
3	7	2						5	1		
4	10	2						7	3	1	



1 『兵棋教範 第1編』 陸軍文庫 明14.10  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/844255> (モノクロ画像)

上図の「歩兵ノ射撃」表では、標的・距離・効果的か否か(最上効~最下効)だけでなく、さいころの目によっても結果が異なっている。有利な状況を作り出しても、運不運によっては大きな成果を得られないことがある。他に「砲兵ノ火力」表もある。

隊標(コマ)の数々。



←激戦となる小梅村付近。隊標（コマ）で両軍の部隊配置が示されている。



### 実録ウォーゲーム

『略法兵棋教例』は本編と附図でウォーゲームの実際の進め方を例示した、いわば兵棋の「リプレイ」です。これを元に、ゲームの様子を再現してみましょう。

何人かの士官が一室に集まり、相談をしています。彼ら「東軍」は地図を見て、部隊の動かし方を検討しているのです。しばらくすると、その話し合いに加わっていなかった教官（「統裁官」審判のような存在）が、士官たちにおおの率いる部隊をどう動かしたいか質問します。騎兵隊長の丁少尉は、小梅村を通過し迅速に西へ進むと答えました。前衛司令の乙中尉は、歩兵と砲で後ろからついていくと答えます。

次に教官は、別の部屋に入ります。そこにも何人かの士官がいて、地図を見て話し合いをしています。彼らが「西軍」です。教官は同じように、各部隊の動かし方を質問しました。騎兵隊長の仁少尉が、小梅村まで東へ進むと答えます。東軍と西軍はそれぞれ架空の部隊を率いてウォーゲームをしているところなのです。当然ですが、今の西軍に東軍の動きは分かりませんし、逆も同じです。

両軍の動きを聞いたところで、教官は地

図を前に、それぞれの部隊が行動を予定通り行えるか検討します。両軍の騎兵が小梅村付近に向かっていているため、どこで遭遇するか進軍速度などを計算するのです。もちろんこのとき、士官たちは地図から遠ざかっていなければなりません。

検討を終えた教官は、西軍を地図のところに呼び「仁少尉の騎兵隊は六時三十分、小梅村より西にある河内村付近に達した」と告げて地図の該当箇所仁少尉の部隊を表す隊標（コマ）を置きました。さらに「敵の騎兵隊を目撃した」と告げます。西軍士官はそれをもとに、次の行動を考えます。

次に教官は西軍を部屋から出し、東軍を呼びます。西軍の配置が示され、東軍の隊標（コマ）も配置されていきます……。

このように教官の判断と状況説明に従って士官たちは作戦を考え、机上の戦争を進めます。

その後、小梅村より西側の橋を焼き落として防御しようとした東軍に対し、西軍は南から回り込んで進撃し、ゲーム内の時間が流れて約3時間後、今や両軍は小梅村を巡って戦っています。

西軍は、南西から壁を破壊したり乗り越えたりして、散開して小梅村への攻撃を開

始すると言います。いっぽう東軍は壁の内側の農舎に部隊を配置して守りを固め、さらに予備部隊を送ると言います。もちろん、言うのは教官に対し、それぞれ別々にです。教官の判断は、西軍は農舎からの射撃で足を止められ、予備部隊の進出を受けて退却せざるを得なくなるというものでした。しかしこれで終わりではなく、両軍は次の作戦を考え始めます……。

この事例では、さいころなどで結果を決定してはならず、教官の判断が重要となっています。しかし両軍が相手の出方が分からない中、目的を達するため同時に行動を決断する様子は、ウォーゲームの基本がよくわかります。

2『略法兵棋教例』 陸軍文庫 明15.4  
本編 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/844288>  
附図 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/844289>  
(いずれもモノクロ画像)

1同様翻訳書だが、地名も和風に改められている。







(1) FUJI (1896 Blackwall) & YASHIMA (1896 Howick).

L. 385 ft. = 117.5 m.

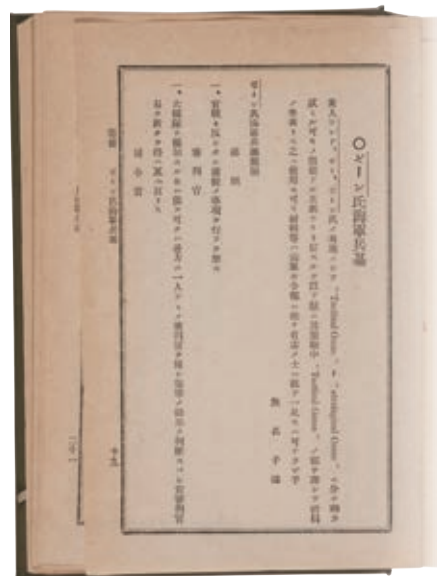
Displ. 11,000 tons. Armament: 12".

Speed: 13 kts. D.R. 12" and 10" = 10 in. the cap. of masts & mast = D.L. and Vent. in the cap. of masts & mast.

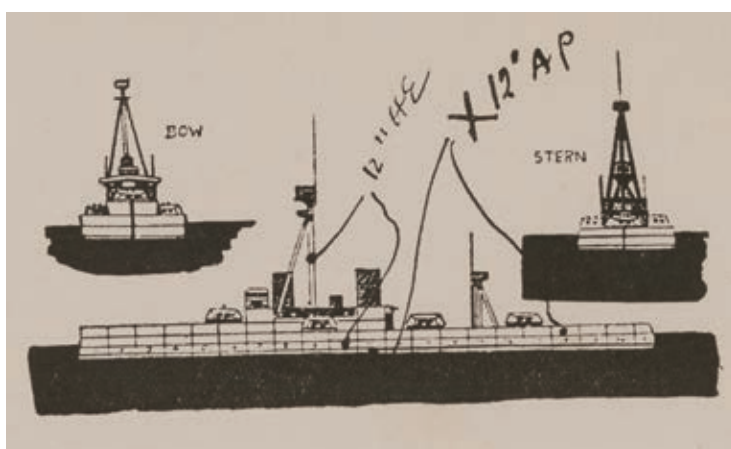


5 All the world's fighting ships, Sampson Low, Marston & Co. <請求記号 55-49> 1898年版

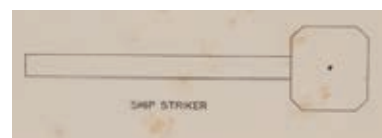
いわゆる『ジェーン年鑑』。日本の軍艦も掲載されている。掲載箇所は当時の最新戦艦「富士」と「八島」。



3 「ゼーン氏海軍兵棋」『水交社記事』100号 明治32年2月 水交社<請求記号 YA5-1256> (閲覧はモノクロのマイクロフィルムとなります)



4 Fred T. Jane, How to play the "naval war game." : with a complete set of the latest rules, full instructions, and some examples of "wars" that have actually been played, S. Low, Marston & co.[1912] <請求記号 Sf-21> ジェーン (ゼーン氏) 自身による、ウォーゲームのルール解説。下図がハエ叩きのような「打杆」。これで左図のように軍艦の絵を叩き、黒点の箇所に「弾が当たった」と見なす。



海軍への導入

海軍でも、ウォーゲームを導入する動きが進んでいました。その様子がかがえるのは、日露戦争で参謀として活躍する秋山真之が1899

(明治32)年に無名子の名で『水交社記事』(3)に寄稿した「ゼーン氏海軍兵棋」という記事です。これも『兵棋教範』と同じく、ウォーゲームのルールを翻訳したものです。図上に軍艦のコマを配置し、一人の士官が一隻の軍艦を指揮する形で、敵味方の艦隊が対決します。

このウォーゲームも、攻撃の結果には運の要素があります。突起のついたハエ叩きのような「打杆」で艦の図を叩き、へこんだところに「弾が当たった」とするのですが、打杆はいくつもあり、それぞれ突起の位置がわからないようになっていきます。また、相手艦との距離が遠くなれば、より遠くから叩くこととなります。

ルールを紹介するだけでなく、秋山はウォーゲームのための道具一式も用意していたようで、「材料等ハ海軍々令部ニ在」るので「有志ノ士ハ就テ一

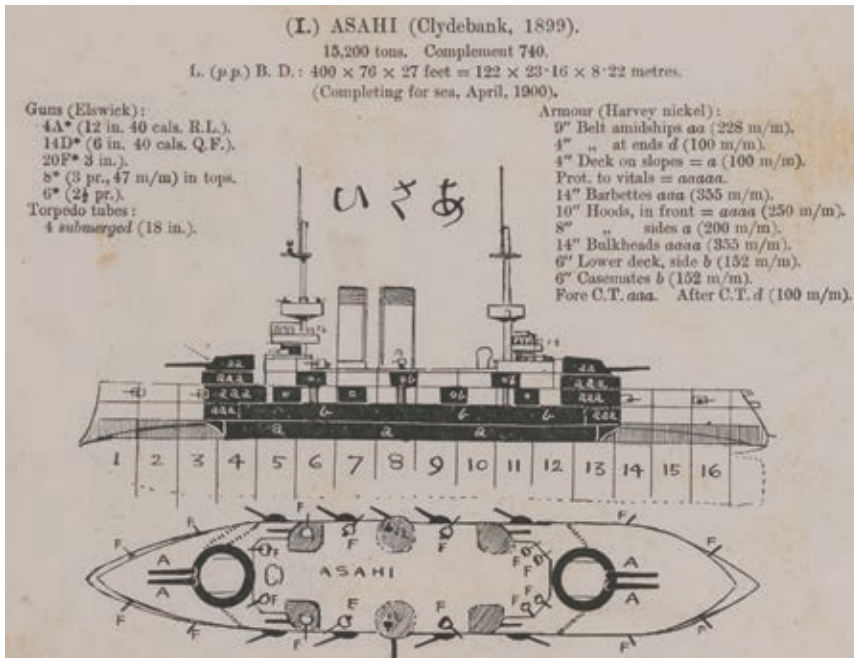
見」してはと、読者を勧誘しています。その後海軍大学校で、陸軍や米海軍などの実践も参考に、兵棋演習が行われるようになりました。

なお、こうしたルールについての原書で国立国会図書館に所蔵があるのは、1912年版How to play the "naval war game." (4)です。秋山が翻訳したものは時代が違いますが、ハエ叩き「打杆」などの図が掲載されています。

ゼーン氏とは

さて、この「ゼーン氏」とは、『ジェーン海軍年鑑』を創刊したJ・F・T・ジェーンのことです。ジェーン年鑑は、現在でもIHS Jane's社により刊行されており、航空・宇宙、船舶、兵器、交通システムなどに関する情報を収録した資料として国立国会図書館でもよく利用されています。

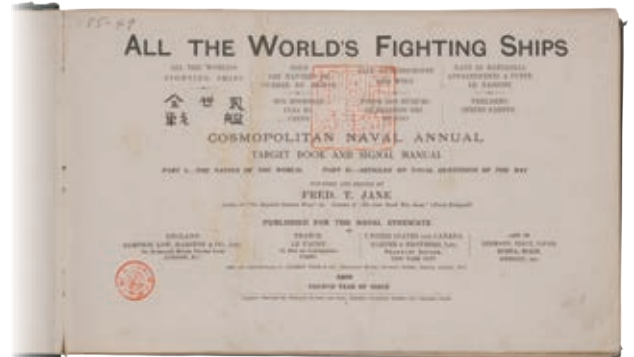
創刊号である1898年のAll the world's fighting ships (5)では「軍艦の砲や装甲が「砲が何センチ」「装甲が何ミリ」といった実際の軍艦の数値ではなく、4 A (威力Aの砲が4門)



5 All the world's fighting ships, Sampson Low, Marston & Co. <請求記号 55-49> 1901年版  
 左は日本の戦艦「朝日」。装甲の厚さや砲の威力が図中にアルファベットで示されている。  
 艦名のほか、右下の標題紙にある「全世界戦艦」など、手書きらしき日本語も見て取れる。

JAPANESE.

Waterline Saitaku	Upper deck Johsuyen	Turrets Yitoku	Trink Su, Utsuo (Kokoromi) Utsuo	Tons	Torpedo tubes Sairat Matsumaharu	Torpedo boat Sairat-Fai	Torpedo Sairat	Submerged Saitaku	Submarine Shan-ai	Stern Kanda	Starboard (side) Iyos	Speed Sairaku	Shields Tate	Screens Kokubuo
小線	上甲板	砲塔	試連轉	噸	水雷發射管	水雷艇	水雷	水中	潜水	船尾	右舷	速力	楯	スクリーン



や a (装甲の厚みが a) というように記号で表されています。この記号は前述の「ゼーン氏海軍兵集」と共通のもので、このルールで、威力 A の砲は Xメートル以内であれば厚さ a の装甲を、Yメートル以内であれば厚さ b の装甲を貫通できる、といったデータが定められていることから、ジェーン年鑑を傍らに、ウォーゲームを行ったものと考えられます。(後の年代のものでは、砲の口径などは実際の数値も記載されるようになっていきます。)

また、巻頭の専門用語集には日本語もあり、日本人が手に取ることも想定しているのではないかと思います。

**軍内外の評価**

このように、陸海軍はそれぞれウォーゲームを行うようになりました。図上演習によって指揮の教訓を学んだことが、1904 (明治37) 年の日露戦争の成功に寄与しているとみる説もあるようです。

日露戦争後もウォーゲームは陸海軍で行われており、『如何に戦術を統裁すべきか』という1940 (昭和15) 年の陸軍の資料では、「兵棋は戦術能

力特に実兵指揮能力向上の為頗る有利な方法である」としています。

いっぽう、1917 (大正6) 年の『校風漫画』(6) では「海軍大学」の校風として「机上兵棋演習」が紹介されています。ユーモラスな挿絵とともに「玩具の艦形木片を並べて取ったり取られたり宛然小供の遊戯」だとしています。軍内部では有利な方法としている一方、外部の人間からは子供っぽいと思われることもあったのでしょうか。

**第二次世界大戦**

第二次世界大戦でも、ウォーゲームによる作戦の検討が行われました。真珠湾攻撃や南方進出のほか、総力戦研究所では政策全般を研究するより範囲の広い、机上でのシミュレーションが行われました。

しかしこうした検討は、正しい運用と真摯な振り返りが伴わなければ有効性を発揮しえないこともあるようです。戦史叢書の『ミッドウエー海戦』防衛庁防衛研修所戦史室編 朝雲新聞社 1971)で、その一例を見てみましょう。

ウォーゲームの子孫であるボードゲームを楽しむ筆者の友人たち。



6 近藤浩一路 著『校風漫画』博文館 大正6  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/956048> (モノクロ画像)  
 海軍大学の校風としてウォーゲームの実施に言及しているが、挿絵も本文も少々ユーモラス。

ミッドウェー海戦前の連合艦隊旗艦の戦艦「大和」艦上でのウォーゲームでは、ミッドウェー島攻撃の最中に米空母が現れ、日本軍空母に大被害が出るという判定が出ましたが、統監部は審判のやり直しを命じ、「我が空母の被害を減らし」て続行させました。判定の巻き戻しには、米空母の出現はもっと遅いとみなした判断が関わっているとされています。現実には、広く知られているとおり、島を攻撃している途中で米空母が現れ日本空母は全滅しました。演習時に大きな被害を受けたことを教訓とせず、こうなったということは、逆説的にウォーゲームの有効性を示しているのではないのでしょうか。

また、「この図上演習における各部隊の作戦計画、経過概要、研究会において問題になった点などに関する資料は入手できない」とも書かれています。対日戦などを研究したウォーゲームの記録を数百件も残しているとされる米海軍とは対照的です。行ったあとの振り返りがシミュレーションとしての図上演習の有効性を増すとすれば、資料の保存も重要なことだと言えるでしょう。

○参考文献

蔵原大 著「近現代ウォーゲーム(兵棋演習)の概史 二百年の変遷」『遊戯史研究』(25):2013.10 <請求記号 Z71-T990>  
 ピーター・P.パーラ著、井川宏訳『無血戦争』ホビージャパン 1993.12 <請求記号 Y78-E1720>  
 秦郁彦 編『日本陸海軍総合事典 第2版』東京大学出版会 2005.8 <請求記号 A112-H259>  
 『陸軍文庫図書目録 (明治41年1月刊)』 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/897370/1> (モノクロ画像)  
 秋山真之会 編『提督秋山真之』 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1234795>  
 高橋弘道 著「海軍兵棋の発達」『波濤』24巻5号 (通号140) 1999.1 <請求記号 Z2-2424>

その後  
 第二次世界大戦後も、コンピュータの活用なども伴いながら、ウォーゲームは引き続き活用されており、日本も例外ではありません。

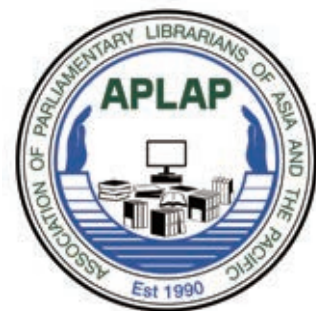
いっぽう、民間では商業的に販売されるようにもなりません。囲碁や将棋、チェスなども軍事の研究から遊戯に昇華したことを考えれば、それも不思議はないかもしれません。民間に広まったウォーゲームは、テレビゲームのシミュレーションゲームや、さまざまなボードゲームのほか、ロールプレイングゲームを生み出す源流ともなりました。「ウォーゲーム」やその子孫は、現代でもさまざまな場所で生き続けています。



第12回

# APLAP大会

(アジア太平洋議会図書館長協会)



2018年10月31日から11月2日の3日間にわたり、第12回アジア太平洋議会図書館長協会 (The Association of Parliamentary Librarians of Asia and the Pacific: APLAP) 大会が東京で開催されました。国会図書館が大会を主催するのは、2000年以来18年ぶりのこと。2017年4月から坂田副館長がAPLAP会長を務めており、開館70周年という記念の年に、ふたたび大会を主催する好機に恵まりました。

## ◆ APLAP とは?

アジア太平洋地域における議会図書館の連携協力を通じて、各国の議会サービスの拡充を図ることを目的として、1990年に設立された組織です。2018年12月現在、40か国・地域の59機関が加盟しています。原則、隔年で開催される大会では、特定のテーマが設けられ、各機関による報告やディスカッションが行われます。

<http://asiapacificparllibs.org/>

詳細報告は『カレントアウェアネス』第339号に掲載予定です。



## 基調講演&セッション

基調講演では、ワイズ氏の所属する英国下院図書館が行う、人材育成に関する多様な取組が紹介されました。また、今大会のように、他機関の職員同士が交流できる機会が重要であるとお話もありました。

講演後には、ワイズ氏の豊富な経験に裏打ちされたお話に刺激を受けた参加者との活発な質疑応答も行われました。



発表するムスティカ・ワティ氏（インドネシア議会事務総局）



司会のローラ・ミカ主幹（国立国会図書館）

「議会図書館・立法調査サービスの人材育成」をテーマに掲げた今大会には、当館を含めて20か国・地域の27機関から50名の方が参加しました。

開会式の後、英国下院からお招きした、IFLA 議会のための図書館・調査サービス分科会会長ステイヴ・ワイズ氏による基調講演と、APLAP加盟機関の全体会議である総会（次ページ参照）が続き、その後、21機関による発表報告セッションが2日間にわたって行われました。

人材育成は、どの機関においても関心の高い課題ですが、参加者の所属機関は規模や役割が異なるため、課題の捉え方も少しずつ異なります。



質問するビズイー・ソーン氏（カンボジア議会研究所）

一定の職員数が確保されている機関がある一方で、職員が一人だけの機関もあります。各国の議会制度と機関の立場、あるいは機関内における議会図書館機能と調査サービス機能の関係も一様ではありません。

また、人材育成や採用には、各地の文化的・経済的背景が少なからず影響します。

機関の持つ性格や背景は異なりますが、どの報告も、より効果的なサービスを提供するために人材育成を進めたいという強い意欲が感じられるものばかりでした。参加者は、お互いの経験や課題を共有し、今後のサービスにつなげることを目指し、真剣に基調講演と報告に聞き入っていました。

## APLAP 総会



総会では、前回議事の承認、財務報告、新役員選出、次回大会開催国の決定などが行われました。

そのほか、今回は1990年の制定以来初となるAPLAP憲章・規則の改正という大きな議題があり、賛成多数で可決されました。

## 歓迎会

大会期間中に、衆参両院議長主催歓迎会と、国立国会図書館長主催歓迎会が開催されました。

こうした時間は、参加者同士が情報を交換し、相互理解を深め、人脈を築くことのできる貴重な機会です。言葉を交わすうちに、参加者の緊張もほどけてゆき、お互いの距離が近くなっていました。



## 文化体験（けん玉）



2日目に行われた APLAP 主催昼食会の後、日本文化を体験するイベントで、参加者がけん玉に挑戦しました。最初のうちは見慣れないものに戸惑っていましたが、徐々にヒートアップ。難しい技を決める人も現れ、皆さんセッションと同じくらい真剣な表情で楽しんでいました。



江戸東京博物館



国会議事堂衆議院本会議場



## 見学



3日目は、国会議事堂をじっくりと見学した後、浅草で昼食をとり、最後に江戸東京博物館を訪れました。

次回の APLAP 大会は、2020年にニュージーランドで開催される予定です。人材育成について話し合い、交流を深めた東京大会は、2年後の再会を約束して終了しました。

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)と国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>)がリニューアルされてこの2月で1年になります。全体のデザインや文字フォントの種類、サイトの構成から画面のスマートフォン・タブレット対応までより使いやすい形に変更しました。

そうした中でみなさんの目を引くのはトップページ上部中央に設けられた数秒ごとに切り替わるスライドショーではないでしょうか。特にお伝えしたい当館のサービスイベントを画像と短い文章で説明する、ホームページの新しい「顔」ともいえるスペースです。元のホームページにもお知らせ用のスペースがサイト下部にありましたが、画像が小さく位置も分かりにくいため、アクセス数が伸びず注目してもらえないことが課題でした。スクロールしなくても見られるところに画像を掲載して、当館のことをもっと知っていただきたい、そんな思いからスライドショーの設置が実現しました。

一度に載せられる画像はあまり多くても目立たなくなるため、4つにしています。リニューアル前には1年間掲載するだけの材料があるか少し不

安もありましたが、いざ運用してみるとイベントが多くスケジュールを組むのも一苦労です。

掲載数週間前にイベントやサービスの担当者から画像と文章を送ってもらいチェックします。画像の見栄えはもちろん、ホームページ全体と色調が合っているかも確認ポイントの一つです。送られてくる画像は作成者のセンスが光るものも多く、誰よりも先に見られるのが係の密かな楽しみになっています。ちなみに元の画像は横1600ピクセル×縦900ピクセルと見た目よりはるかに大きいものです。それというのもスマートフォンやタブレットなどで見てもきれいに表示する必要があるためなのですが、実寸で見せられないのは少し残念です。

始まって早くも1年、シンプルなもの、優美なもの、ユーモラスなものいろいろな画像を掲載してきました。おかげさまでアクセス数も順調に増えているようです。みなさんもホームページにアクセスしたとき、スライドショーにぜひ注目してみてください。そして少しでも興味がそそれらたらクリックして当館のイベントやサービスを知っていただけますと幸いです。今後の「顔」の移り変わりにご期待ください。

(電子情報流通課 石の上にも早三年)



ホームページの「顔」



# 本屋に

# ない本

当館所蔵資料中、抜群の知名度を誇る坂本龍馬の「新政府綱領八策」。展示会等でご覧になった方はご存知のように、実は単体の資料ではなく、『亡友帖』と名づけられた卷子(巻物)の一部である。他に中岡慎太郎、高杉晋作、藤田東湖、木戸孝允など錚錚たる幕末の志士たちの書簡や手蹟が貼り交ぜられている。その旧蔵者がこの年譜の当人、土佐出身の石田英吉(1839-1901)で、後年、他の資料とともにご子孫から寄託を経て寄贈された(東京本館憲政資料室所蔵石田英吉関係文書1)。歴史的資料はそれ自体が貴重な記録であることはもちろん、来歴に関する情報もまた重要である。石田英吉とはどんな人物だったのか、年譜を繙いてみた。

譜を繙いてみた。

現在の安芸郡安田町の地下医師の家に生まれ、地元在住の坂本龍馬長姉の夫に学問の手ほどきを受ける。二十歳のころに医学修行のため大坂の緒方洪庵の適塾に入門するも、時代は幕末。志士となり、天誅組の変、禁門の変の修羅場を辛うじて生き延び、第二奇兵隊を経て海援隊で活躍、そして明治を迎える。戊辰戦争では振遠隊の一員として秋田を転戦、勝利を得て凱旋したのが凡そ三十歳のころ。その後は新政府に出仕、やがて秋田県権令、長崎県令、元老院議員、高知県知事等を歴任、男爵に叙され貴族院議員にも選出された。年譜は、石田の六十余年の人生を

跡付ける本人の著述や公的な記録、同時代者の記述さらに土地に残る記憶を丹念に集め、その時々石田の様子がかがえる資料の原文の引用や肖像写真を織り込んで構成されている。そこには、文献によって確認可能な事実を積み重ねてその実像を明らかにし、地味ながら後々にも利用されていくものを作ろうという編者の意図が看取される。巻末には、「石田英吉小伝」と題された解説が付けられている。

脚本家の倉本聰は作品に取りかかる際に、まず登場人物たちの詳細な履歴書を作るといふ。個人的な経歴や社会的な事件が書き込まれた履歴書を参照すれば、その人物がある場面で何を思

い、どう行動するかが自ずと定まってくるということらしい。年譜をつぶさに見ていくと、龍馬墓碑の工事費にと石田の名前で金百両がおくられたという記載や、ある建碑式で祭辞を読みあげるうち情が迫って涙声になったという本人の述懐に目が留まる。石田は、幕末の動乱を生き残った者として、明治の世を目にすることなく非業の死を遂げたかつての同志の顕彰に心血を注いだ。残された『亡友帖』はその結実の一つであり、この緻密な年譜は、未だ書かれていないドラマをうちに秘めつつ、石田の事蹟とその思いを後世に伝えていくものになるだろう。

(眞子ゆかり)



## 石田英吉年譜

勤王の志士から明治政府の官僚へ

安田町教育委員会

2018.3 26p 30cm

<請求記号 Y121-L16304>

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

デジタルライブラリーカフェ「今年も」開店中

2018年9月15日、9月29日に東京本館で、3年目となる「NDL デジタルライブラリーカフェ」を開催しました。

今回は「二次利用」や「ウィキペディアタウン」をテーマとし、情報化社会において、デジタルアーカイブに公開されている資料や地域の図書館の資料を利用して、どのようなことができるのか、様々な立場の専門家をゲストに語り合いました。

講演内容について詳しく知りたい方は、「2018年NDL デジタルライブラリーカフェ<報告>」(カレントアウェアネス E2081)を併せてご覧ください。

(電子情報部電子情報企画課次世代システム開発研究室、電子情報流通課)

9月  
15日

アイデアをかたちにする二次利用のたのしみ

「二次利用」は既存の著作物をコピーしたり、編集したり、加工したりして利用することを指します。二次利用のエキスパートとして京都高低差崖会崖長の梅林秀行さんと、二次利用のためのシステム研究のエキスパートとして同志社大学の原田隆史教授に、それぞれの立場から二次利用について語って頂きました。梅林さんからは、二次利用とは読む人の資料理解を助けるための「補助線」を引くことであるとして自身の成果物の紹介や、二次利用しやすいデジタルアーカイブの条件といったお話が、原田さんからは、標準化は様々な機関が提供するメタデータを横断して使えるようにするために重要であり、標準に合わせて提供することで社会全体の利益につながるということをお話し頂きました。



「祇園林夜桜」  
(『花洛名勝図会』1864年・元治元年  
国際日本文化研究センター蔵)  
[http://www.nichibun.ac.jp/meisyozeue/karaku/page7/km\\_04\\_01\\_048t.html](http://www.nichibun.ac.jp/meisyozeue/karaku/page7/km_04_01_048t.html)



梅林秀行 著『京都の凸凹を歩く』  
青幻舎 2016.5 <請求記号 GC156-L101 >  
の21ページ目

Q ニューヨーク公共図書館は高解像度画像を有償提供していますが、気に入った画像があれば購入しますか？

A 自由な加工を許してもらえるのなら、内容によっては購入します。(梅林)  
国内のデジタルアーカイブに料金を払う文化が定着しているとは言えませんが、必要なデータに対して個別に料金を支払えるようになれば状況が変わってくると思います。(原田)

Q 利用者のリテラシー向上のためにできることはありますか？

A 資料を扱う教育を充実させることで、とりわけ人文系で「補助線の引き方」を徹底的に教えてほしいです。(梅林)



## ウィキペディアと図書館～人と場と情報～

ウィキペディアタウンイベントの運営に積極的に関わっておられる、Wikipedia 日本語版管理者の目下九八さんと愛知県田原市中央図書館副館長の是住久美子さんをお招きして、ウィキペディアタウンを図書館が支援する事例を中心にお話し頂きました。是住さんからは市民協働や郷土資料の活用において図書館が果たす役割について、目下さんからは運営側から見たイベント参加者のモチベーションについて、世界に自分の記事を発信することの達成感とイベント中に書きたいことを書ききれない残念感が鍵になっているのではないかとお話がありました。

\*ウィキペディアタウンとは、その地域にある文化財や観光名所などの情報をインターネット上の百科事典「ウィキペディア」に掲載し、さらに掲載記事へのアクセスの容易さを実現した街(町)のことである。(Wikipedia より)

日本では、地域住民が街歩きをして、地域の図書館の郷土資料等を活用して調べた成果を投稿する取組として展開されています。

**Q** 英語で記述することで、日本の情報の海外展開、ということも考えられますか？

**A** 在日外国人の生活には、日常に現れるものの使い方を英語で説明した項目が必要ではないかと思います。また英語だけでなく、外国人本人が自身の母語で自分の勤めている会社や住んでいる地域のことを書くと、故郷の人々が共有できるので良いと思います。(目下)

**Q** ウィキペディアタウンのテーマ設定の方法はどうしていますか？

**A** 街を案内してくれる方と相談して決めます。ちなみにどこまで書くかは、街歩きで目にしたものに引っ張られて変わっています。(是住)

**Q** ウィキペディアタウンについて、図書館員の関わり方はどうあるべきでしょうか？

**A** 結局は誰が主体的にやりたいのかという点に尽きます。図書館がやりたければ是非やれば良いと思います。(目下)



梅林秀行氏  
京都高低差崖会館長

公開されない資料は、利用者にとって存在しないものと同じになってしまいます。デジタルアーカイブへの要望として、どのアーカイブをどのように活用するかといった利用者側の自己決定権を尊重し、公開する資料を自主規制しないで頂きたいです。同時に、議論や批判の対象は、利用者の活用の中身や結果でなくてはならないと考えます。今回、参加者のみなさんと交流・議論する中で、課題の所在があらためて明らかとなったように思えます。アーカイブをめぐるさまざまな議論自体が、私たちの社会を形作る公共圏であるはずと信じています。



是住久美子氏  
愛知県田原市中央図書館副館長

ウィキペディアタウンやその他のオープンデータに関する取り組みについて、公共図書館職員の実践として紹介しました。目下さんから理論的なお話も聞くことができ、楽しく参加させていただきました。国会図書館の一室がカフェのようになって、参加者のみなさんと双方向で対話できるなんて、国会図書館のイメージがずいぶん変わりました。参加者のみなさんのお話をもう少し聞くことができる時間があれば良かったです。

## 平成30年度国際政策セミナー「アメリカの外交政策と日本」

アメリカ第一主義を掲げ、従来の国際的枠組みに次々と波紋を投げ掛けるトランプ政権の登場により、アメリカに対する我が国の関心はますます高まっています。

国立国会図書館では、アメリカの著名な国際政治学者であるマイケル・マスタンドウーノ氏をお招きして、トランプ政権の対アジア外交についてお話しいただくとともに、日本の専門家を交えて、今後の我が国の対応も視野に入れたパネルディスカッションを行います。

- 日時 2月7日(木) 14時～17時
- 会場 東京本館 新館講堂
- プログラム (日英同時通訳付き、入場無料)
  - 〔基調講演〕
  - マイケル・マスタンドウーノ氏 (ダートマス大学教授) 「パネルディスカッション」
  - ・コーディネーター
  - 久保文明氏 (東京大学大学院法学政治学専攻教授)
  - ・報告者
  - 前嶋和弘氏 (国立国会図書館客員調査員)
  - 上智大学総合グローバル学部教授)
  - 定員 300名 (事前申込制・先着順)
  - 申込方法 ホームページ「イベント・展示会情報」から
  - 2月5日(火)までにお申し込みください。
  - 問合せ先
  - 調査及び立法審査局調査企画課 連携協力室
  - 電子メール [ml-ipseminar@ndl.go.jp](mailto:ml-ipseminar@ndl.go.jp)

## 関西館小展示(第25回)「人体ワンダーランドからだをめぐる冒険いまむかし」

ひとの身体は不思議に満ちています。古代から、人間の身体が何できていて、どうして動くのか、病の原因は何か、ということが探究されてきました。

第25回の関西館小展示は、「人体のしくみ」「骨・筋肉」「神経・脳」「免疫」「治療・療法」の5つのトピックに沿って、歴史的なものから最新の成果まで、人体のしくみに関する本や雑誌約100点をご紹介します。



師範学校[編]『体操図:文部省正定』浜田県, [明治]  
<請求記号 特53-833>



第24回関西館小展示「百花繚乱! ガーデニングの世界」の様子

- 開催期間 2月21日(木)～3月19日(火)
  - ※日曜・祝日を除く
- 開催時間 9時30分～18時
- 会場 関西館閲覧室(地下1階)

また、関連講演会を次のとおり開催します。奮ってご参加ください。

- 演題 PD・1とがん  
～免疫療法の新境地を開いた分子～
- 講師 石田靖雅氏 (奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科准教授)



- 日時 3月2日(土) 14時～16時
  - ※講演後、当館職員による展示紹介を約15分を行います。
- 会場 関西館第1研修室(1階)
- 定員 70名 (事前申込制・先着順)
- 申込方法 ホームページ「イベント・展示会」の申込フォームからお申し込みください。
- または、左記の情報をご記載の上、FAXでお申し込みください。
- ①件名「小展示講演会申込み」、②氏名(よみがな)、③電話番号、④FAX番号
- 申込先 (FAX) 0774(94)9108

## 平成30年度児童サービス研究交流会

国際子ども図書館では、児童サービス関係者が集まり、特定のテーマについて最新の動向を学び、相互交流等を行う場として、児童サービス研究交流会を開催します。今年度のテーマは「ヤングアダルト世代への図書館サービスの在り方を考える」です。

○日時 3月11日(月) 10時30分～16時30分

※終了後、希望者に館内見学を実施します。

○会場 国際子ども図書館アーチ棟1階研修室1

○定員 80名(事前申込制・先着順)

○申込方法 ホームページからお申込みください。

○参加費 無料。ただし、旅費等は受講者側の負担となります。

○問合せ先 国際子ども図書館 企画協力課

電話 03(3827)2053(代表)

## 新刊案内

### 平成29年度国際政策セミナー報告書

「EUにおける外国人労働者をめぐる現状と課題―ドイツを中心に―」

EUにおける人の国際移動の枠組み

ドイツとヨーロッパの労働移民

戦後日本の外国人労働者問題と政策

岐路に立つ日本の外国人労働者政策を考える―非熟練労働

と看護・介護セクターを中心に―



A4 95頁 不定期刊  
ISBN 978-4-87582-824-2  
以下のURLからPDFファイル  
をご覧いただけます。  
<http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/document/>

## 外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第278号

アメリカの2017年女性、平和及び安全保障法  
ドイツにおける財政調整制度の改革―州間財政調整の縮小と連邦交付金の拡大―  
ドイツのSNS法―インターネット上の違法なコンテンツ対策―  
中国の新たな国家監察体制―中華人民共和国監察法―



A4 86頁 季刊 1,800円(税別)  
発売 日本図書館協会  
ISBN 978-4-87582-826-6

## レファレンス 815号

「障害者による文化芸術活動」の推進  
税務情報の義務的開示制度―BEPSプロジェクトとEUの新指令―  
日本における生殖補助医療の規制の現状と法整備の動向



A4 64頁 月刊 1,000円(税別)  
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

## 平成30年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会

平成30年12月3日、東京本館において標記の懇談会が開催されました。これは、国立国会図書館が、国立国会図書館協力委員会委員館の図書館長および関係機関の代表者を招いて毎年行っているものです。

今年度は、「今後の図書館間の連携協力の在り方」をテーマとし、国立国会図書館から「国立国会図書館と大学図書館の今後の連携協力の可能性」と題して、レファレンス協同データベース、研修交流事業、外国の図書館等に対する図書館送信、マラケシュ条約への対応を含む障害者サービス等の図書館協力業務、ジャパンスーチの機能・開発状況・メタデータ連携と活用、オープンデータの利活用に関する取組について報告しました。深澤良彰早稲田大学図書館長からは「予算削減下の図書館協力の在り方」と題して、早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンターとの間で現在開発中のシステムの共同利用及び書誌データの共同調達等についての報告がなされました。

その後、大学図書館間のシステム共同構築に取り組んだ背景及び事情、書庫の新設・増設・維持の課題や資料の分担収集・保存の可能性、ジャパンスーチにおけるメタデータの収録範囲と今後の展開、大学関係者が必要とする学術的な内容の視覚障害者等用データの制作における課題、国立国会図書館による公立大学図書館への研修状況及び研修参加機会増の対応策、国立国会図書館におけるオープンデータの範囲と権利処理の課題など幅広い内容について、質疑、意見交換が行われました。

## 平成30年度国立国会図書館長と行政・司法 各部門支部図書館長との懇談会

平成30年11月19日、国立国会図書館東京本館において標記の懇談会が開催されました。これは、各府省庁と最高裁判所に置かれた支部図書館の充実に資するため、支部図書館長等を招いて毎年行っているものです。支部図書館26館、分館4館から、42名の支部図書館長、支部図書館職員が参加しました。

国立国会図書館（中央館）は、支部図書館機能向上に向けたデジタルアーカイブの活用の可能性について、支部図書館との連携の事例等を含め報告し、現状と問題意識を共有しました。

支部図書館からは、奥積雅彦支部総務省統計図書館長が、同館の概要と明治百五十年記念展示サイト等の直近の取組について、山内輝暢支部経済産業省図書館長が、同館の概要とデジタル化や利用促進の課題について報告しました。

また、福井健策氏（骨董通り法律事務所代表パートナー）が、「デジタルアーカイブ構築の意義と課題」とデジタル資産の覇者となれ」と題する特別講演を行い、欧州の取組やその背景となったプラットフォームの寡占状況、アーカイブを振興する法制の進捗を紹介しつつ、デジタルアーカイブの意義やデジタル情報資源の保存・共有・活用に関する法的・制度的な課題等を明らかにしました。



平成30年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会

## 第30回納本制度審議会

平成30年11月29日、第30回納本制度審議会が、審議会委員9名、専門委員3名が出席して東京本館で開催されました。

審議会では、第15回代償金部会の審議経過について齋藤誠部会長から、平成29年度第1回オンライン資料の補償に関する小委員会の審議経過について福井健策小委員長から、それぞれ報告を行いました。また、事務局から、出版物納入状況、電子書籍・電子雑誌収集実証実験事業の現状等について報告を行い、質疑応答がありました。

納本制度審議会委員・専門委員名簿

（五十音順 敬称略）（平成30年11月29日現在）

会長

中山 信弘 東京大学名誉教授

### 会長代理

福井 健策 弁護士

### 委員

植村 八潮 専修大学文学部教授

江上 節子 武蔵大学社会学部教授

遠藤 薫 学習院大学法学部教授

相賀 昌宏 一般社団法人日本書籍出版協会理事長

角川 歴彦 株式会社KADOKAWA取締役会長

近藤 敏貴 一般社団法人日本出版取次協会会長

齋藤 誠 東京大学大学院法学政治学研究所教授

鹿谷 史明 一般社団法人日本雑誌協会理事長

重村 博文 一般社団法人日本レコード協会会長

白石 興二郎 一般社団法人日本新聞協会会長

永江 朗 公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員長

根本 彰 慶應義塾大学文学部教授

野原 佐和子 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授

### 専門委員

佐々木 隆一 一般社団法人電子出版制作・流通協議会 監事

三瓶 徹 一般社団法人日本電子出版協会事務局長

樋口 清一 一般社団法人日本書籍出版協会事務局長

### ○代償金部会所属委員

齋藤誠（部会長）、江上節子（部会長代理）、相賀昌宏、

鹿谷史明、重村博文、根本彰、福井健策

### ○オンライン資料の補償に関する小委員会所属委員・専門委員

福井健策（小委員長）、植村八潮、遠藤薫、齋藤誠、永江朗、

根本彰、佐々木隆一、三瓶徹、樋口清一

※審議会に関する情報は、左記に掲載しています。

<http://www.ndl.go.jp/jp/collect/deposit/council/index.html>

# 2

NATIONAL  
DIET  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2019.2

NO.694  
FEBRUARY  
2019

## CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>  
*Kyoho Meibutsucho*—Legendary Japanese swords
- 04 World Library and Information Congress:  
84th IFLA General Conference and Assembly
- 12 Strolling in the forest of books (19):  
Tabletop wargames from modern Japan
- 18 12th conference of the Association of Parliamentary Librarians of Asia  
and the Pacific (APLAP)
- 24 The NDL Digital Library Cafe is open again this year!
- 22 <Tidbits of information on NDL>  
Front face of the NDL website
- 23 <Books not commercially available>  
*Ishida eikichi nenpu*
- 26 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

平成31年2月号 (No.694)

平成31年2月1日発行

発行所 国立国会図書館  
編集者 三浦良文  
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1  
電話 03(3581)2331(代表)  
FAX 03(3597)5617  
E-mail geppo@ndl.go.jp  
<http://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。  
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。  
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL  
D I E T  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2 0 1 9 . 2

 国立国会図書館  
National Diet Library, Japan

図

国

国

冊

人

六